家族の晩餐

阿久 悠

講談社

家族の晩餐（ばんさん）

著者―阿久悠

一九八二年十二月十日　第一刷発行

装丁―大橋歩

発行者―三木章

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二　電話　東京〇三(九四五)一一一一―大代表　振替　東京八―三九三〇

印刷所―豊国印刷株式会社／千代田オフセット株式会社

製本所―藤沢製本株式会社

定価―九八〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

© YU AKU 1982 Printed in Japan

ISBN4-06-200348-1（0）　(文2)

目次

第一章　母と妻と女のパーティ　5
第二章　第一日曜日のシベール　38
第三章　天使のような落ちこぼれ　63
第四章　母と娘に友情はない？　89
第五章　アルコール中毒の天才　116
第六章　コーンスープの女たち　147
第七章　秋が深まる日の泣かないで　176
第八章　テーブルを囲むウサギたち　207
あとがき　244

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

家族の晩餐

第一章　母と妻と女のパーティ

1

二月の十六日に十八度もある陽気が変なのだ。変ってやつは、きちんと何処かで修正されるもので、今日、そう、たった一日過ぎた二月の十七日は、十五度低くなって三度と冬の面目を保っている。

昨日慌てふためいて冬眠から目覚めた食用蛙が、今朝凍死した。

可哀想に。

けど、大方の人は笑っただろうな。鋭敏過ぎるやつの悲劇も、蛙だと喜劇になるんだな。まあ、どちらでもいいけど。私は鋭敏過ぎもしないし、蛙でもないし。だから、喜劇も悲劇も関係ない。

凍死したドン・キ・ホーテみたいな食用蛙の話は、また聞きなのだ、テレビの。さてえ、というのが口癖のニュース・キャスターが、唇のはしっこの方で笑いながらしゃべっていた。真面目に話していると思われるのがいやだったのかもしれない。かといって、個性ってものもあるから、ケラケラ笑

いながらってわけにもいかないしね。それで、唇のはしっこの笑いなのさ。六日後の二月二十三日に、ローマ法王、教皇ヨハネ・パウロ二世が来日しますというニュースを読む時には、どこもかしこも厳粛だったからね。

それはともかく、昨日が十八度で今日が三度。もちろん摂氏さ。ニューヨークじゃないから。此処は東京だから。

で、どちらが異常かというと十八度の昨日なのだ。何がどうなったのか変だよ。二月の十六日に、十八度もあるポカポカ陽気なんてのは。

変なことは好きだけれど、変なことはつづかない。今度の場合は特に極端で、たった一日で元の寒さ、いや、それ以上に戻ってしまった。

おまけに今年一番の降雨量で、時々雪になったりしている。憂鬱を絵に描いたような風景で、白と灰色以外の色彩がない。ザラザラしている。空気の中の粒々が凍結しているようで、見るからに冬なのだ。

そんな風景が三角の窓から見える。

三角の窓というのは、ちょっとしたいいまわしで、私が、ベッドの中から手をのばし、カーテンをたぐっているので、三角の視界が出来上っている。ちょうど視界の斜め下あたりを高速道路が走っている。車の音がひどくうるさかったが、ついこの前、ママの稼ぎが特別よかった月に、二重窓に取り変えたので大分静かになった。

だから、今も、気にしなければしないですむという程度の音を立てて、車が通り過ぎている。よくいえば、灰色の風景の中の幻想みたいで、悪くいえば、都心の——天現寺というあたり——マンションの四階の窓から見える寒々とした現実に過ぎない。

私はというとベッドで寝ている。

時々手をのばしてカーテンを引き寄せ、三角の視界をつくっている。

何だかもう、昨日の異常陽気で起きた雪崩のように、三ヵ月もなかった生理が始ってしまったのだ。

生理が三ヵ月もないというのは只事ではない。そう、特に私なんかの年頃では一大事件なのだ。絶望という二文字が、ストロボのように明滅する筈である。私は十六歳。

しかし、私の場合は、全くもって正真正銘の処女であるから、その心配の必要はない。絶望の二文字も、せいぜい困惑ぐらいで、時には無いことが幸福だったり、安堵だったりする。生理が三ヵ月も無いということも、只の不順に過ぎない。どこか未成熟なのだ。

身長は百五十九センチある。十六歳の女子の全国平均が百五十六センチ台であるから、外まわりの発育は順調といえる。すこぶるとまではいかなくても、まあまあだ。しかし、成熟度からいうと、自分でも認めてしまうくらいに遅れている。

初心とか、純真ということじゃないな。

もっと生々しい女の機能みたいなものが、完全に出来上っていないという感じなんだな。それが精神的にも大きな影響を与えると見えて、私は、同じ年頃の女の子にくらべて、ひどく遅れているという自覚がある。

犬や猫が発情期になるということは、相手に気がつくという状態であると聞いたことがあるけど、私は、その、気がつかないという状態なんだな。

そう、気がつく機能が完成していないし、もしかしたら無いのかもしれない。

だからといって、私は、そういうことをひどく気に病んでいるとか、悩んでいるということではない。

むしろ、このままの未成熟の状態の方がいいと思っているところもあるのだ。

何ていうのかな。その方がタイプだし、気楽だし、逆に思いつめて考えるなら運命みたいに思えることもあるからね。

私には、どこかトロイところがある。頭が悪いというのではないけど、どういえばいいのかな、ひどくものぐさで、消極的で、人生に対して機敏に反応しないという性格かな。

そういう性格の女は、何故か未成熟のままの方がいいような気がする。女の生理の重さまで背負いこんだら、益々人生に機敏に反応出来なくなるかもしれないじゃないの。

トロイというのは私の唯一最大の武器かもしれない。

それで、生理が毎月々々訪れないことも、むしろ、ほっとしているようなところがあるのだ。さっきもいったように、訪れない理由に心悩ますこともないのだしね。

その代りというのかな。三ヵ月に一度か四ヵ月に一度訪れた時には、苦痛を積立てて、利息まで付けたような苦しみになる。

鎮痛剤の四時間に一錠というきまりを守るのさえ辛い。出来ることなら、副作用を起してもいいから飲みつづけたい気持にさえなってしまう。

顔色も、体内の血液が全て流れ出てしまったかのように蒼白になって、吸血鬼に襲われても、もう少し原形をとどめているのではないかと思えるほどなのだ。

その地獄が今訪れている。

昨日の馬鹿陽気のせいなのだ。あの変調が私の体内の何処かを刺激して、雪どけを誘った。氷結のままでいいのに。

これじゃ、凍死した食用蛙とご同様のもてあそばれ方じゃないの。

ああ気が重い。鏡を見たら、まるで精気が失せ、オバンだったよ。

で、学校は休むことにした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ママにそういうと、
「しようがないわね。生理のたびに学校を休んでちゃ。もっとも、あんたの場合、三ヵ月に一度の不定期だから、まあ助かってるようなものだけど」
とひどいことをいった。
「でも、めんどうみてあげられないわよ」
「いいの」
「今日は忙しい日なんだから。真夜中まで詰ってる日なんだから」
「大丈夫よ」
それでも、ママは、暖かくして寝ていることよと暖房を強に上げ、送風孔がカラカラと音を立てると、古いマンションを呪い、
「ああ、唯一の財産がこれじゃね」
と見当違いの愚痴をこぼしたりしていたが、大して厭な顔もせずに、朝昼兼用の食事をつくってくれた。
バターと蜂蜜がたっぷりかかったパンケーキに、レモンのスライスをそえた紅茶、それに、トマトにたまねぎのミジン切りをまぶし、醤油入りのドレッシングをかけたサラダという献立てで、結構心がこもっていると思えたな。うん、思えた。
私は、ベッドの上で躰を起し、太腿のあたりにトレイを置いて、ノロノロと——いつものことだけど——食べていた。何しろ紅茶を一杯飲むのに十五分もかかる。猫舌でね。
まあ、そればかりじゃなしに、私の感情の中に焦るという項目がないのが第一の理由かもしれないしね。
ママは、ベッドの端にチョコンと尻をひっかけるようにして腰を下し、私のノロノロとした食べっ

ぶりを見ていたが、
「あんたも、ギクシャクと女になるのね」
と溜息まじりにいった。
私は、えッと顔を上げ、でも、そのことに関してはお互いに質問も解説もなく——実は心の中では、成程ギクシャクかと感心はしていたのだが——トマトを二片残して食事を終えた。
そのトマトはママが食べた。指でつまんでね。銀色のマニキュアの爪が妙な具合に光って、それをベロリと舐めたりすると、あッ、躰のために良くない、なんて感じがした。
やがて、ママは仕事に出かけて行った。今日は本当に忙しいらしい。そういう時の昂揚と緊張と、そして、少々気重だという感じが表情からうかがえる。今日に限ったことではない。忙しい時にはいつもそうなのだ。
で、出かける時に私の部屋へ顔を出した。
珍しく、毛皮のコートを着ていた。もう、それこそ、余程のことがないとめったに着ないやつ。確かモールっていったかな。もぐらさ。もぐらのロングコートをはおったママは、眉をひそめながら、
「全く、意地も通用しない寒さだわ」
と弁解がましくいって、躰をくるりとまわした。かすかだけど防虫剤の匂いがした。
「意地って？」
「出来るなら、こんなもの着たくないじゃないの。でも、風邪をひいてもつまらないしね。あんたは生理痛で寝てるし、その上、ママまで風邪っぴきじゃ」
「似合うわよ」
と私はいった。
「どうだか」

「似合うわよ。それさ、我が家の財産で二番目に高いものでしょ。このマンションの次にはそれよ。確か七十万円っていってた」
「馬鹿。高い安いじゃないの。何が七十万円よ。役に立たないことだけは覚えているんだから。いい。ママはね。意地を押し通せない貧しさを今心の中で嘆いてるんだから。こんなもの着たくないわよ。わかるでしょ。あんたも一応女なんだから」
一応だって。よくいうよ。
とまあ他の女の子なら唇をとがらせるか、どこかでグレた気分になるものだけど、私の場合、ある程度納得して、そうかなあ、なんてことをいいながら、ママを送り出した。
それ以上グチャグチャいっていると、ママの回転の早さと私の遅さが衝突して、ママの更年期前期のヒステリーを誘発してしまう。
それは全くもって不幸なことだからね。悲惨といってもいい。特に、今日は、生理痛で下腹がシクシク痛んでるのだし、貧血さえ起しかねない状態だからね。何事もさりげなく過したい。無抵抗にさ。だから、
「行ってらっしゃい。さくらさん、明美さんによろしく」
といった。
さくらさん、明美さんというのはママの仕事の仲間で、今日も一緒の筈なのだ。もっとも、よろしくというのは余り意味はない。私からよろしくと伝えられても困るかも。
「じゃあね。寝てるのよ。暖房は強にして。カラカラと少しうるさいけどね。マンションが古いんだから仕方ないじゃないの。鎮痛剤はほどほどに。それから、夕食は何か考えて適当に。鍵かけるのよ。忘れずにね。忘れそうだな。ママが外から掛けて行くわ。ベッドに寝てるところへ押しこまれたりしたら、一たまりもないから。あんたなんか悲鳴もあげられないでしょ。そうよ。ママが、ガッチ

リと掛けて行く」
「お願い」
「それから、あんた、ナプキンだか、タンポンだか、あるわけ？」
「あるわよ」
全くこのての会話が大声で交されるということは、家の中に男がいないという証拠なのだ。仮に小学生でも男と名のつくのがいたとしたら、お互い声をひそめるか、耳うちするぐらいの気遣いはすると思う。アレといったような表現にするとかさ。それが、まるで平気で現物を口にするということは、ママも、私も、周辺に男がいないという生活に慣れてしまっているのだね。女同士のいうにいわれぬ特殊な緊張感というのはあるけれど、至極普通のタブーみたいなものが欠けている。
だから、やはり、男がいないという状況を当り前だと思ったり、慣れたりしてはいけないのではないかな。どうかしら。ねえ、どうだろうね。
とにかく、現実を語れば男がいない。ママには夫がいないし、私には父がない。兄も弟も、それから、肉親縁者でないまでも、たとえば、ママの愛人とか、単なる居候という形にしろこの部屋には男はいない。
訪れた人さえない。まあ厳密にいえば、管理人、パトロールの警官、郵便配達、ガス、電気の検針、電気器具のサービス係等々いないわけではないけれど、この中で、靴をぬいで、お茶を飲んで行った人といったら、UHFアンテナを取り付けに来た電器屋ぐらいだものね。
だから、私たちはどこか明らさまになってしまうんだな、といいたかったのだけどね。それが、ひどく悪いことなのか、欠陥のあることなのか知らないよ。
要するに、ママが、出がけに、ナプキンとかタンポンとか叫んだので、あれあれと思ったまでさ。
そう、それだけ。

まあ、逆にいえば、女二人だけの生活なのに、声をひそめたり、耳うちしたりしていたら、よけい気持が悪いものだよね。ああ、誰が何といおうが、これは不気味だよ。

さて、昨日がひどく暖かい日で、今日が反対に寒い日で、土砂降りがおさまりかけたと思ったら雪がチラついたりで、陰鬱っていうのかな、そんな状況の中で、私たち母と娘は二度も財産って言葉を口にした。おそらくは無意識にね。深い意味もなく。

最初はママで、エアコンの吹き出し口がカラカラと音を立てた時、唯一の財産がこれじゃねえと、だんだんに古びて行くマンションを嘆いた。次は私で、ママがモールの毛皮のコートを着ているのを見て、マンションの次に高価な我が家の財産だとか何とか。

実際、とりあえずは全てママの名義だけど、私たちに財産があるとしたら、これぐらいだものね。二ＬＤＫのマンション。少々古ぼけて、機能的にも時代遅れのところもあるけれど、とにかく都心といってもいい場所――天現寺――にある堂々たる財産。

そして、そうだなあ、後は、中央ヨーロッパ産のもぐらの毛皮のロングコートと、アップライトのピアノかな。そう、そんなもの。

解説者めいていうならさ、我が家に栄光というものが存在した頃にマンションを買い、幸福というものが存在した頃ママからママへ、モールのコートが贈られたってこと。

そして、はっきりいってしまえば、相当の憎悪――子供の目から見ても凄まじかったよ――の末に離婚、マンションは慰謝料代りにママが受けとり、私と住んでいる。

そういうこと。

で、同じママの経済力――その時はあった――で買ったマンションに住むことには抵抗がないのに、毛皮のコートを着るのに意地を持ち出すのは、多分、愛という言葉をしみつけて貰った物だからだろうね。それくらいのことはわかる。

それなら捨ててしまえばいいのだろうけど、そこがそれ、さっきもママがいった、意地を通せない貧しさを嘆いているということになるのよ。

私にはどうでもいいことだけどな。私はぼんやり暮したいから。キリキリした神経や、生々しい生理を持ち合せないで、フワッと雲のように、薄ぼんやりと暮したい。そういう性格だと思うしね。才能の程度だともね。

やれやれ、なんてことを思っていたら、また下腹がシクシクと痛み出した。エキセドリン、エキセドリン、いやいや、バッファリンでも、セデスでもいい。飲まなきゃ。

それで、二時間ばかり眠って、また、カーテンを三角に開け、二重ガラスの窓の向うの風景を見ると、すっかり黄昏のはかなさに沈んだ街の上に雪が舞っていた。

しばらくそうして見つめていた。生理痛は大分おさまっている。何げなく掌で顔をなぜると粉がふいていた。そういえば、顔を洗っていない。

それはともかく、不思議に学校のことは思わない。不思議でもないかな。今日だけがどうってわけでなく、いつもあまり学校のことは気にならない。いや、学校だけでなく、友だちとか、同じ年代の人間に対する関心がひどく薄いところがある。何故かしらね。

焦点の定まらない目で外を見ていると、モールのロングコートをひるがえして、何処かの階段——そう、全く抽象的に——を昇って行くママの姿がうかんだりした。

短かめのカーリーヘヤーに近い髪型。小造りの、そう、可愛いっていえる顔立ち。何となく巫女さんみたいな印象の表情。わかるかなあ。そういうの。銀色の爪。全体に小柄だから若く見える。そんなママが、階段を昇って行く姿。

ただそれだけ。ちょっとした思念。幻想。実際に見えているものは、ポプコーンの屑のような冗談っぽい雪と、高速道路でギクシャクしている車の列だけ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.